

X 附属動物病院
(動物医療センター)

X 附属動物病院（動物医療センター）

1. 概要

附属動物病院は、獣医学教育及び研究の目的をもって患畜の診療を行うため、1912(明治 45)年に本学の前身である東北帝国大学農科大学の家畜病院として開設されたことに端を発し、今日までわが国における酪農畜産や家畜診療の指導的役割を果たしてきた。1918(大正 2)年に東北帝国大学農科大学が北海道帝国大学に昇格すると、家畜病院は農学部附属となり、1952(昭和 27)年の農学部獣医学科からの獣医学部独立に伴い、翌 1953(昭和 28)年、国立学校設置法の一部改正により同法に定める学部附属教育研究施設として官制化され、獣医学部附属家畜病院となった。1964(昭和 39)年、総面積 2,600 m²の当時としては東洋一の家畜病院として新築されたが、その後老朽化が進み、1994(平成 6)年に大改修が行われた。2002(平成 14)年、改組に伴い獣医学部附属施設から大学院獣医学研究科附属施設となり、2006(平成 18)年には家畜病院から動物病院という名称に変更された。さらに、獣医学教育の充実と高度獣医療の実践のため、2013(平成 25)年 5月に総面積約 3,000 m²、総工費約 10 億円(大学からの借入金)で旧動物病院の北側に隣接するように北海道大学動物医療センター(通称)として新築され、施設内容の拡充・充実がはかられた。(別添資料 20 附属動物病院建物配置図)

2. <観点>診療の体制状況

【観点ごとの分析】

(1) 診療科と診療スタッフ

内科、外科及び繁殖科の 3 診療科に加えて臨床検査科を設置している。さらに内科は一般内科、循環器科、消化器科、血液内科、神経科に、外科は一般外科・軟部外科、整形外科、腫瘍科、麻酔科の各専門診療科に分かれ、多様な疾患に対して高度な知識と技術を提供できるような診療体制をしいている。これらの診療科の担当は、病院専任教員ならびに獣医内科学、獣医外科学、繁殖学、及び臨床分子生物学の 4 教室所属の教員全員により行っている。また、平成 25 年度からは文部科学省からの国立 4 大学連携補助事業(平成 24～平成 29 年度)費により 4 名の特任助教が採用され、病院における診療業務ならびに学生の臨床教育に従事している。さらに臨床研修獣医師、動物看護師及び臨床系教室所属の獣医師の資格を有する大学院生が、指導教員とともに診療に携わっている。平成 26 年 4 月から寄附講座として診断病理学講座が設置され、客員教授と特任助教各 1 名を採用し、病院の検体の病理診断ならびに細胞診断を担当している(資料 68)。

平成 25 年度の新動物病院(動物医療センター)開設を機に、スタッフを増員することで多様な業務に対応している。

資料 68 附属動物病院スタッフ数

年度	平成 22 年度	平成 23 年度	平成 24 年度	平成 25 年度
教 員	15 [1]	15 [0]	17 [1]	15 [1]
獣 医 師	1 [0]	1 [0]	2 [1]	2 [2]
臨床研修獣医師	9 [4]	7 [1]	7 [0]	15 [5]
動物看護師	4 [4]	5 [5]	7 [7]	10 [10]
技術職員	1 [1]	1 [1]	1 [1]	1 [0]
用 務 員				1 [1]
受付事務員	2 [2]	2 [2]	2 [2]	3 [3]
合 計	32 [12]	31 [9]	36 [19]	47 [29]

[] 内の数字は女性スタッフ内数

出典：庶務担当データ

(2) 管理・運営体制

本研究科教授の中から選出される附属動物病院長は、動物病院の管理運営にあたるとともに、診療体制及び運営体制についての審議を行う動物病院運営委員会の議長を務める。病院運営委員会の構成員は病院長、研究科長、副研究科長、各講座主任、臨床系教室准教授・講師、事務長から成る。病院専任教員は大学院獣医学研究科を兼任し、教育・研究を行っている。

(3) 施設・設備

新しい動物医療センターにはアメニティーを意識した広い待合室、12 の診察室、参加型臨床実習に対応可能な広い処置室、2 つの X 線検査室、3 つの超音波検査室、CT/MRI 検査室、内視鏡検査室、化学療法室、5 つの手術室、手術見学室、集中治療室、臨床血液検査室、特殊検査室、放射線治療室、カウンセリング室、カンファレンスルームなどを配備し、施設内容の拡充・充実が図られた。

現在、動物病院に設備されている教育・研究用の主な設備・機器には、多種類の動物血液を検査できる血球計数器、多項目血液生化学自動分析装置、血液凝固測定装置、血液ガス分析装置、電解質測定装置、ホルモン測定装置、吸入麻酔装置、多目的 X 線撮影装置、X 線 CT 断層撮影装置、磁気共鳴撮像 (MRI) 装置、デジタル超音波診断装置、ビデオ内視鏡診断装置、腹腔鏡システム、関節鏡、低エネルギー放射線治療装置 (オルソ)、高エネルギー放射線治療装置 (リニアック) などがあり、より高度な診断・治療を実践するとともに、参加型臨床実習における臨床教育に活用している。

【分析項目の水準と判断理由・改善方策】

(水準)

期待される水準を大きく上回る。

(判断理由)

高度かつ先進的な獣医療サービスの提供と獣医臨床教育の改善を目的とした動物医療センターの開設に伴い、診療体制ならびに診療機器の充実化が図られたことから期待される水準を大きく上回ると判断した。

(改善方策)

現在の外来診療科は基本的には内科，外科，繁殖科 3 科にとどまっており，複数の担当教員から成る専門診療科体制のさらなる充実が求められる。

現在の診療受付時間は午前中に限定されており，地域のニーズに合わせて夜間・救急対応も含めた診療サービスの拡充を図る必要がある。

国の補助事業で採用された特任教員は 5 年任期制であるため，継続雇用に向けた財源の確保または雇用制度の改善が必須である。

診療業務の円滑化のためにはサポータースタッフの充実を図る必要がある。

動物病院専任スタッフ数は 35 名，診療収入も 3 億 5,000 万円に及ぶ状況にも関わらず，専任の事務職員が一人もいない状況は管理運営上問題であり，専任事務職員の配置が強く望まれる。

獣医学教育の国際認証取得に向け，夜間・救急診療体制の構築が必要であり，学生の参加も見据えた設備ならびに組織体制の整備が急務である。

3. <観点>診療の状況

【観点ごとの分析】

(1) 診療日

一般外来の診療受付は，月曜日から金曜日までの午前 8 時 30 分から同 11 時 30 分の間で行っている。診療は基本的に開業獣医師からの紹介予約制であるが，セカンドオピニオン希望の飼い主を考慮し，紹介状なしの受診にも対応している。休診は祝日，年末年始の特別休暇及び指定日となっている。

(2) 診療料金

昭和 36 年 11 月 27 日付制定の「北海道大学獣医学部附属家畜病院規定」で定められた料金が基本となっているが，概ね 3-5 年ごとに文部科学省指導による料金改定を行っている。現行の診療料金は平成 25 年 4 月に改定されている。大動物（牛・馬）・中動物（綿羊・山羊・豚）の診療料金は「農業災害補償法施行規則」の規定に基づいている。

(3) 診療頭数及び診療収入

平成 22 年度から平成 25 年度までの診療頭数及び診療収入は資料 69 に示すとおりである。診療頭数は平成 22 年度から毎年約 1,000 頭ずつ増加し，平成 25 年度には延べ約 11,500 頭に達した。診療収入は平成 22 年度は約 1 億 6000 万円であったが，毎年増加傾向にあり，平成 25 年度には平成 22 年度の約 2 倍の 3 億 2000 万円となった。これらはほとんど犬や猫といった伴侶動物の診療に依存しており，平成 25 年度における診療頭数ならびに診療収入における犬，猫の占める割合は，いずれも 99%に及んでいる。資料 70 に示す動物病院運営予算は収入金額に応じて配分されるが，新動物病院開設のための大学からの借入金約 10 億円に及び，今後数年間は年間約 1 億円の返済金が必要なため，運営予算からの高額な診療機器の更新や新規購入は当面困難になることが予想される。

資料 69 平成 22 年～平成 25 年度診療頭数及び診療収入状況 単位：頭，千円

年度		牛	馬	豚	綿山羊	犬	猫	その他	計
平成	診療頭数	207	5	1	0	7,553	970	9	8,745
22 年度	金額	3,361	228	6	0	147,248	15,224	230	166,299
平成	診療頭数	247	9	0	0	8,391	1,133	3	9,783
23 年度	金額	5,093	406	0	0	197,832	22,793	16	226,141
平成	診療頭数	80	8	0	0	9,327	1,238	4	10,657
24 年度	金額	1,182	346	0	0	242,877	27,494	132	272,033
平成	診療頭数	51	6	0	0	9,880	1,419	26	11,382
25 年度	金額	720	295	0	0	288,315	35,951	603	325,886

・金額は千円未満切り捨てで表示（千円）

出典：会計担当データ

資料 70 過去 5 ヶ年の病院収入見合経費の配分額 単位：千円

年度	病院収入を算定の基礎とする配分額 (収入見合)			借入金 (元本)	合計	返済額
	当初	追加（精算）	計			
平成 21 年度	77,795	55,516	133,311		133,311	
平成 22 年度	118,953	49,055	168,008		168,008	
平成 23 年度	135,128	78,471	213,599	2,021	215,620	
平成 24 年度	207,045	49,433	256,478	458,553	715,032	
平成 25 年度	328,426	△ 18,468	309,957	523,424	833,382	△50,262
				984,000		△50,262

・金額は千円未満切り捨てで表示

出典：会計担当データ

【分析項目の水準と判断理由・改善方策】

（水準）

期待される水準にある。

（判断理由）

診療頭数ならびに診療収入は年々増加傾向にあり，診療の状況は期待される水準にあると判断される。

（改善方策）

多種多様な動物を対象とする獣医学の教育的観点からは，診療対象のほとんどが犬と猫に集中していることは望ましい状況とはいえ，牛や馬などの大動物やウサギなどの

エキゾチックアニマルを対象とした診療を学生に経験させる必要がある。

4. <観点>教育・研究における役割の状況

【観点ごとの分析】

伴侶動物としての犬や猫が長寿になってきているのを反映して、動物病院では老齢性疾患（慢性心疾患，慢性腎機能不全，腫瘍，内分泌性疾患，慢性皮膚疾患など）の診療が多く，高度な外科的処置が必要とされる疾患も増えてきており，地域における二次診療施設としての役割を担っている。また，教育病院として学生の臨床教育ばかりでなく，臨床獣医師及び海外からの研修獣医師の卒後教育の場としても活用されている（資料71）。

北大動物病院では平成24年度から全国に先駆けて参加型臨床実習を開始し，実習期間中に学生が習得すべき事項をスタンプラリー形式にまとめ，何をすべきか明確にすることで学生の实習参加意欲を高めることに役立っている。さらに，高次画像診断法，疾患遺伝子の遺伝子解析及びその検出法などの診断技術の開発，創傷治癒促進機序の解明，動物に負担の少ない抗腫瘍療法，疾病発生予防のための対策確立とその指導など，多方面からの臨床獣医学的研究にも活用されている。

【分析項目の水準と判断理由・改善方策】

（水準）

期待される水準にある。

（判断理由）

教育面においては従来の見学型実習から参加型臨床実習へ移行し，学生の学習意欲向上に役立っている（別添資料23）。また，平成25年度からはじまった世界展開力強化事業により，海外学生との交流が盛んになり，グローバル化に貢献している。

研究面においては，症例数が増えたことによって，症例報告のみならず，様々な疾患の回顧的研究報告などが活発に行われるようになってきていることから「期待される水準にある」と判断した。

（改善方策）

参加型臨床実習の導入に伴い，二次診療中心の大学病院においていかに一次診療を学生に体験させるかが大きな課題であり，地域獣医師会と連携して検討する必要がある。

大学のグローバル化を目指すうえで，今後さらに海外学生との交流を活発に行う必要がある。

遺伝子レベルの研究やトランスレーショナルリサーチを推進することで，動物医療から人医療に貢献する役割が期待される。

現在の診療対象は犬，猫に集中しており，多種多様な動物の診療に関わる機会を学生に提供すべきである。

大学の世界展開力事業やインターンシップの依頼等により海外からの学生の受け入れが増えることは確実であり，それらに適切に対応すべくスタッフの数と質の充実を図る必要がある。

獣医学教育の国際認証取得に向け，夜間・救急診療体制の構築が必要であり，学生の

参加も見据えた設備ならびに組織体制の整備が急務である。

5. <観点>地域拠点動物診療施設としての状況

【観点ごとの分析】

高等教育機関としての大学は、教育研究の充実とともに、社会の期待に応じてゆくことが期待され、その方策として社会との連携・協力の強化・促進が求められている。かかる観点から、獣医学研究科・学部における唯一の社会との直接的なつながりの場、また獣医学の研究成果を社会に還元する拠点としての附属動物病院の果たしている役割は大きい。近年、動物愛護・福祉の思想が広く社会に普及し、単なる愛玩動物としてのペットではなく、伴侶動物、また家族の一員として扱われるようになるとともに、これら動物の獣医療においても人と同様の医療サービスが求められる情勢になっている。そのような社会的要求にみあった獣医療を実践する場として十分機能することによって、社会との連携を一層深めることができる。

動物病院の診療は、基本的には開業動物病院からの紹介予約制による二次診療であり、ワクチン接種やフィラリア予防などには対応していない。一方、セカンドオピニオンを求める飼い主に配慮して、紹介状なしの受診にも対応している。一次診療施設からの紹介症例については、適切な検査を実施して可能な限り確定診断を得るようにしている。診察後は診察報告書を速やかに作成して紹介元の動物病院に送り、診察結果を報告するとともに今後の治療方針等について適切な助言を行っている。

動物病院では、卒後臨床教育の観点から原則2年間の臨床研修獣医師制度（有給）を設立し、教員の指導の下、高度獣医療の実践の場に身をおくことで専門的知識及び技術の習得のみならず、学会活動にも積極的に参加させ、その成果の公表を推進している。本研修制度による臨床研修獣医師の採用人数は、平成22年度が9名、平成23、平成24年度が7名、平成25年度は15名であった。また、前期（4月入学）及び後期（10月入学）の年2回、研究生（獣医臨床研修生）の募集を行い、社会人の卒後教育研修を行っている。さらに動物医療センター2階に設置されたカンファレンスルームを利用して、地域獣医師の卒後教育を目的としたセミナーを定期的で開催し、臨床研修や学術情報交換の場として有効に活用している。また、資料71に示すように国内のみならず国際的な獣医療卒後研修の場としても活用されている。

加えて、動物病院の診療業務に携わる臨床系教員の多くはそれぞれの専門的立場から、地域獣医師の開催する研修会、研究会の講師・アドバイザーとして出席し、社会人再教育の役割を果たしている。

さらに、動物病院では、毎年、地域の動物看護師専門学校の依頼を受け、実習生を積極的に受け入れて臨床実習の場を提供しているのみならず、実習経験者から毎年のように附属動物病院の動物看護師として採用することで、地域の人材活用にも貢献している状況にある。

資料 71 研究生・臨床研修生受入数

	獣医内科学	獣医外科学	比較病理学	繁殖学	臨床分子生物学	病院	計
平成 22 年度	2 (1)	1	0	2 (2)	0	0	5 (3)
平成 23 年度	1	3(1)	0	0	0	0	4(1)
平成 24 年度	1	3(1)	0	0	0	0	4(1)
平成 25 年度	0	2	0	1(1)	0	0	3(1)

()内の数字は外国人留学生の内数を表す。国別内訳は中国 3 名, マレーシア 1 名, 韓国 1 名

出典: 教務担当データ

【分析項目の水準と判断理由・改善方策】

(水準)

期待される水準にある。

(判断理由)

平成 25 年度の動物医療センター新築を契機に, 卒後臨床教育の一環として地域獣医師を対象としたセミナーを定期的に開催するなど, リカレント教育に積極的に貢献していることから期待される水準にあると判断した。

(改善方策)

卒後教育セミナーについては持続的に開催することが必要である。また, 検査技術や手技の習得を目的としたウェットラボなども今後検討する必要がある。

地域の拠点動物病院としての役割や活動を市民に理解してもらうために, オープンキャンパスとは別に道内の小中高校生向けの職場体験を実施するなど, 地域社会に積極的に貢献していくことが望まれる。